加美町協働の景観まちづくりプラン　別冊

まちづくりブック

加美町の未来をつくるアイディア手帳

加　美　町

加美町協働の景観まちづくりプラン　別冊

まちづくりブック

加美町の未来をつくるアイディア手帳

加　　美　　町

もくじ

1 はじめに ……01
- この本の使い方
- 「景観」から地域をとらえる
- 「景観」を糸口にしたまちづくり

2 加美町の景観の見どころ ……07
- 商店街となりわいの景観
- 家並みと暮らしの景観
- 豊かな自然の景観

3 加美町の未来を想像しよう ……21

4 いくつもの加美町の未来像 ……31
- まちづくりを進めていく枠組み
- まちづくりのシナリオ集
- 未完成のシナリオたち

5 取り組みをはじめよう ……103

6 おわりに ……107

1

はじめに

はじめに、この本のキーワードである「景観」や「景観まちづくり」について考えていきます。

この本の使い方

私たちのまちの未来を、ともに語ろう

加美町では、早稲田大学と協働で調査やワークショップを重ね、「景観」をキーワードにしたまちづくりの計画である『加美町協働の景観まちづくりプラン』を策定しました。

その内容を少しでも多くの人に知ってもらい、まちの未来を一緒に考えてくれる人を少しでも増やすために、このたび『まちづくりブック』と題して、一冊の本を作りました。

この本では、「景観」とはなにか？「景観」を考えていくことで、まちのどんな未来が考えられるのか？そして、実現してほしい未来のために、自分には今なにができるのか？がテーマになっています。
調査やワークショップなどから見つかった加美町の魅力や、住民のみなさんの願いを「読み物」としてまとめるだけではなくて、この本を読んでいるみなさんと一緒にまちづくりを「考えて」いけるように工夫しました。

みなさんにとって「まちづくり」がもっと身近なものになり、知らなかったまちの良いところが共有されるだけでなく、この本に書かれていない魅力やアイディアを、みなさん自身の手で発見するきっかけになればと願っています。

加美町　協働のまちづくり推進課
早稲田大学　後藤春彦研究室　一同

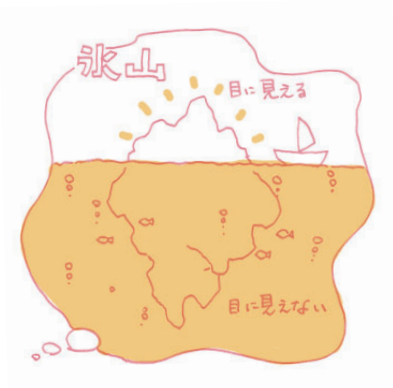
「景観」から地域をとらえる

目に見える美しさだけじゃない

「景観」というと、どうしても歴史的な街並みや、自然風景など、見た目の美しさに気を取られてしまいます。でも、そうした美しい風景は、実はそこに暮らす人々の目に見えない努力や営みによって支えられているのです。

たとえば一面に広がった田んぼに、太陽の光が反射してキラキラと輝いている様子が美しいと感じたとしましょう。でもその美しさは、稲刈りや手入れを日々続けているからこそ得られるものです。

美しい風景には、その裏側に目に見えない「地域の営み」があるのです。「風景」と「営み」が組み合わさって、はじめて「景観」が作られると考えます。逆に、なにか問題のある風景を良くするには、やはり地域の営みから解決していかなければいけないのです。



景観を氷山にたとえると…

氷山を想像してみましょう。海の上に氷が頭を出していますね。でも、海の下には、もっと大きな氷が続いているのです。

「景観」も、氷山のようなものだと考えていいかもしれません。「目に見えている部分」は氷山の一角にすぎず、その背後には、目に見えない水面下の氷があるように、もっと大きな、深い、地域の営みが隠れているのです。

景観を考えることは、「目に見える風景」から、それを下支えする「目に見えない部分」を想像することなのかもしれませんね。

「景観」を糸口にしたまちづくり

「景観」から課題をみつけ、地域をよりよくする

まちづくりは、自分たちが住みよく、安心して暮らせるまちをつくるための活動です。まちづくりの手法はいくつもありますが、ここでは「景観」を手掛かりとして、「目に見える風景」からそれらを支える「地域の営み」の課題などを見つけ、解決するための取り組みについて考えます。

下の図のように、地域には様々な営みがあります。そこに暮らすみなさんが何ができるのかを考え、取り組むことが必要です。

2

加美町の景観の見どころ

まずは、加美町の景観の見どころを見ていきましょう。まちづくりの手掛かりが、見えてくるかもしれません。

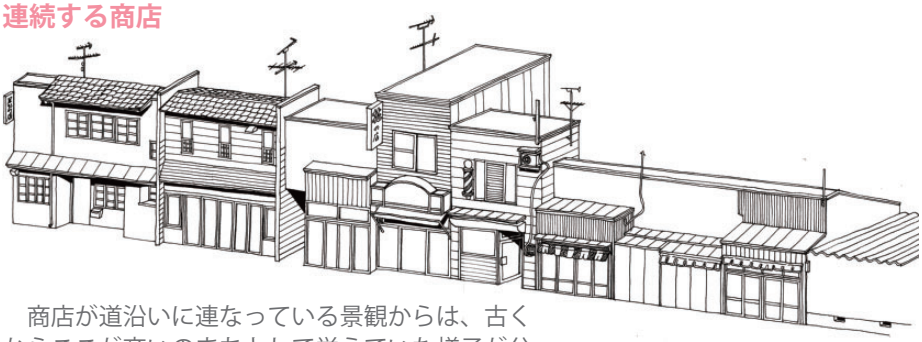
商店街となりわいの景観

中世より羽後街道（国道457号）、中羽前街道（国道347号）の交わる流通・商業・文化の中心地として栄えた中新田、酪農で栄えた小野田、昭和より鉱山で栄えた宮崎の３地区の商店街には、それぞれ異なった魅力のあるまちなみがあります。

写真：小野田商店街を貫く国道

2-1 商店街の建物からみる「暮らしのかたち」

連続する商店

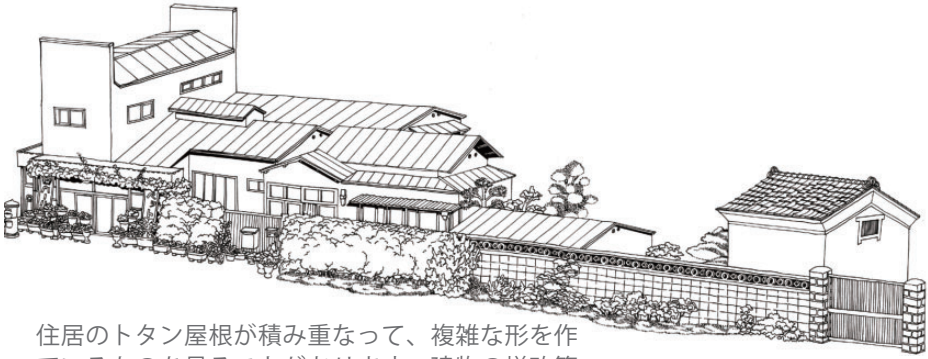


商店が道沿いに連なっている景観からは、古くからここが商いのまちとして栄えていた様子が分かります。

商店・住居・蔵一体の家

細長い建物で、表通りには商店、裏通りには蔵が面しており、その間を細長い住居がつないでいます。現在も商店街沿いに見ることができますが、解体されずにすべて残っているものは少なくなっています。

積層する屋根の家



住居のトタン屋根が積み重なって、複雑な形を作っているものを見ることがあります。建物の増改築を重ねた歴史が表れています。

2-2 なりわいが表れるまちなみ

蔵が立ち並ぶ歴史あるまちなみ

中新田商店街の裏通りには蔵が多くみられ、歴史を感じるまちなみを形成しています。

「看板建築」が立ち並ぶまちなみ

小野田の商店街をはじめ、各商店街では「看板建築」が多く並んでいる様子がみられます。「看板建築」とは、道に面した建物の表面が看板のように装飾されており、うしろは普通の家になっているような商店建築の様式のことです。

家とお店の入り混じったまちなみ

商店と住宅が混在しており、商いと暮らしが密接な関係にある地域もあります。宮崎では、商店街のすぐ裏には土手川が広がり、自然と調和した景観が広がっています。

2-3 なりわいの景観から考えること

商店街ににぎわいを生み出す工夫

商店街は、買い物だけでなくお祭りなど古くから住民の方々がにぎわう場所として親しまれていました。しかし現在では、店を継ぐ後継者がいないという問題や、商店街の経営に関わる人々の高齢化などにより、空き家や空き店舗が増加しているという現状にあります。また、まちなかには若い人が集まる場所がないことが指摘されており、商店街ににぎわいを生み出す工夫が求められています。

今あるものを活かすためには

商店街には、歴史のある蔵や店舗など多くの資源が残っています。また、お祭りをはじめとする多くの人々が集まるイベントもあり、商店街に活気を取り戻すには、商店街にある資源を活かすことを考えなくてはなりません。そのためには、商店街が抱える課題がどこにあり、商店街にはどのような資源があるのかをしっかりと把握する必要があります。

家並みと暮らしの景観

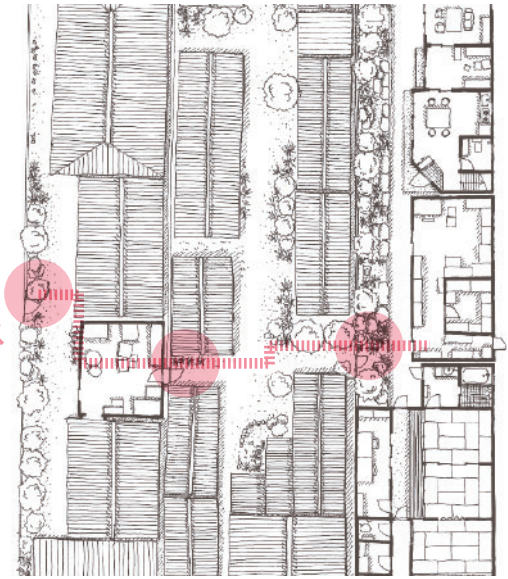
加美町には、商店街、田んぼ、山間、山沿いなど、様々な場所に家並みが広がっています。そこでは、それぞれの地形の特徴に合わせた暮らしの工夫が行われています。家並みの景観を観察することで、生活の工夫が見えてきます。

写真：小野田原行政区集会所付近から見た風景

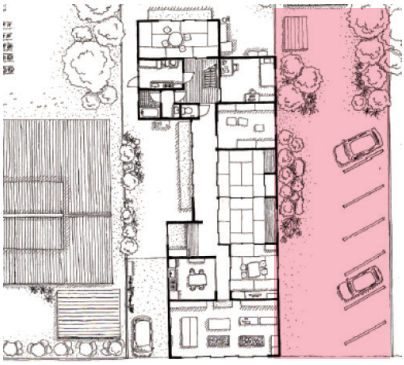
2-4 商店街での暮らし

商店街に並ぶ住宅は、大通りに面する商店とその奥に広がる住居部分で構成されています。その中で、中新田には隣接する庭をつなぐ「木戸」という扉が残っており、小野田では建て替えにより、元の場所は新たなスペースになっています。また、宮崎では境界があいまいでつながっているように見える庭があったりと、各地域での違いも見られます。

隣の家の庭や倉庫をつなぐ「木戸」

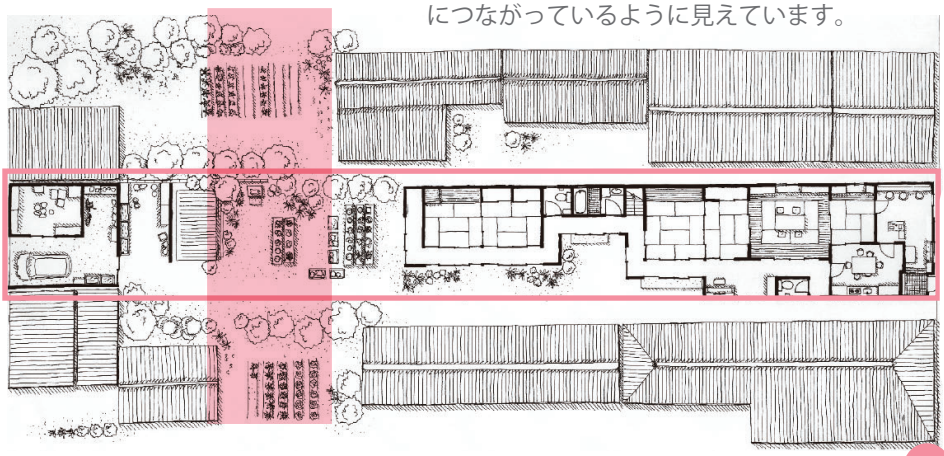


建物が後退してできた駐車スペース



つながっているように見える庭

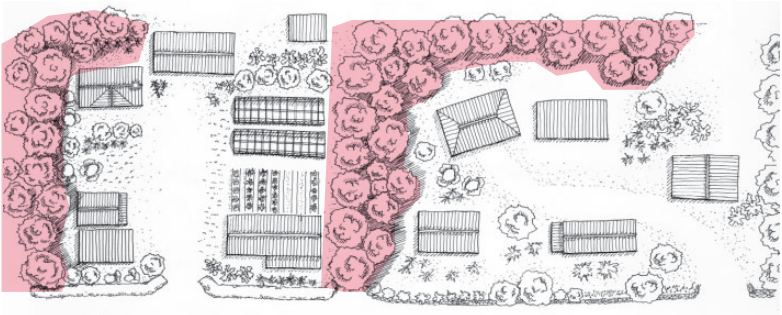
下の宮崎の例では、細長い住居に対して垂直に庭が連なっており、境界線があいまいなためにつながっているように見えています。



2-5 自然に囲まれた暮らし

田んぼの中に点在する住居の周囲は、居久根（いぐね）で囲まれています。居久根は住居の北西に位置する屋敷林で、吹雪や山おろしの風から住まいを包むように守る役割があります。また、山沿いには家や倉庫、田んぼなどが連なっている集落風景も見ることができます。

「居久根」とともにある暮らし



庭の植栽が連なって織りなすまちなみ

宮崎では、それぞれのお家で管理している庭木が連なって大きな緑地帯を形成し、緑豊かなまちなみをつくり上げている様子が見られます。

2-6 暮らしの景観から考えること

暮らしを豊かにするための活動

まちなかは、住民の方々の生活に最も近い場所であり、住民一人ひとりの生活が営まれている場所です。しかし、近年では生活環境の変化にともなって、住民同士のつながりが薄くなりつつあります。特に子どもと高齢者など、世代を超えた交流の減少は課題の一つです。これからの加美町の暮らしをより豊かにするためには、住民同士のつながりをもう一度考え直すことが求められています。

遊夕市（小野田）

ナイトバザール（宮崎）

暮らしの魅力を発信する

まちなかには、普段の生活の中では気付かない魅力的な資源があります。上手くアピールすることによって、町外の人をまちへ呼び込むことができるかもしれません。多くの町外の人々がまちと関わりを持つことによって、まちなかに新たなにぎわいが生まれます。まず、自分たちのまちに何があり、どのように活かせるのかを考える必要があります。

音楽フェスティバル（中新田）

うめぇがすと鍋まつり in 加美

豊かな自然の景観

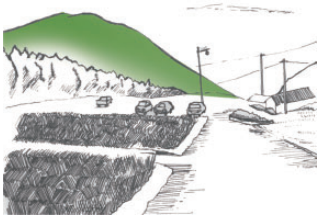
「加美富士」の名で親しまれている薬莱山や町内を蛇行して流れる鳴瀬川・田川は、四季折々の表情を見せます。住民は、このような自然と共生しながら、生活を営んできました。

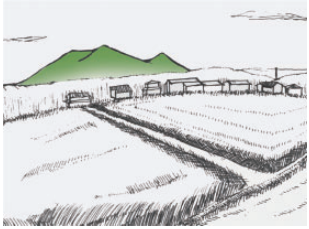
写真：宮崎西川北行政区を流れる田川中流

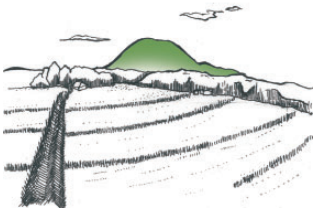
2-7 豊かな自然の景観

薬莱山

加美富士とも呼ばれる薬莱山は、加美町のシンボルとして多くの住民に親しまれています。方角によって違って見える薬莱山の形や、季節によって表情を変える姿など、住民は薬莱山を身近な自然のランドマーク（目印）としてとらえているようです。


やくらい施設から見る薬莱山


西小野田から見る薬莱山


鹿原から見る薬莱山

東小野田から見る薬莱山

鳴瀬川

上流の漆沢ダムから小野田を横断するように薬莱山の北側を通っています。下流では河川敷が親水公園として整備されていたり、川と並行してサイクリングできる道が整備されていたりと、気持ちの良い空間となっています。

上流付近

中流付近

下流付近

田川

田川は、鳴瀬川と共に加美町の代表的な川です。奥羽山脈を水源とし、宮崎を横断するようにして中新田で鳴瀬川と合流します。中流には、増水時に道路ごと水の下に埋もれてしまう河床路など特徴的な道路もあります。

上流付近

下流付近

2-8 まちなかの身近な自然

まちなかの自然

加美町には大自然だけでなく、商店街から一歩外れた道沿いに進むと、親水空間が整備されていたり、まちなかを水路が通っていたりと、生活空間の中にも小さな自然がたくさん見られます。

鳴瀬川沿いの景観

鳴瀬川沿いの景観は、川との距離によって様々な表情を見せます。

格子でふたをされた水路

住宅地では、鉄のあみで覆われた水路も目にします。安全ではありますが水の風情を感じることはありません。

ガードレールが境となる水路

道路沿いには、水路と道の間にガードレールが設けられた水路が見られます。

家の前を流れる水路

田んぼの近くでは、家の前に水路が流れている地域が多く見られ、その上には小さな橋が渡されています。

家の裏を流れる水路

家の裏に張り巡らされた水路では、橋を渡した上にプライベートな物を置くといった生活感が見受けられます。

田んぼの中の農業用水路

農地を流れる用水路は、いたるところで見られます。コンクリート側溝や土側溝など、様々な種類の水路があります。

2-9 自然の景観から考えること

自然とのふれあいの機会をつくる

集落は、人の生活と豊かな自然が共生した場所です。しかし、近年では自然がすぐ近くにあるにもかかわらず、人々の生活とは切り離されている現状があります。特に自然といえば、昔の子どもたちにとっては貴重な学習の場でしたが、今では子どもたちが遊ぶ姿も見られなくなっています。今後どのようにして自然とのふれあいの機会を作っていくかを考える必要があります。

自然の魅力を多くの人に伝える

自然とふれあえる暮らしは、都会やまちなかで暮らす人にとっては魅力的なものです。身近にある自然の魅力などを町外に発信しながら、里山での暮らしを体験してもらうなど、多くの人がまちと関わることができる環境を整えていくことで、にぎわいと交流の創出につなげることができます。

3

加美町の未来を想像しよう

これまで見てきた景観の見どころから、私たちはどんなことができるでしょうか？身近な例から一緒に考えてみましょう。

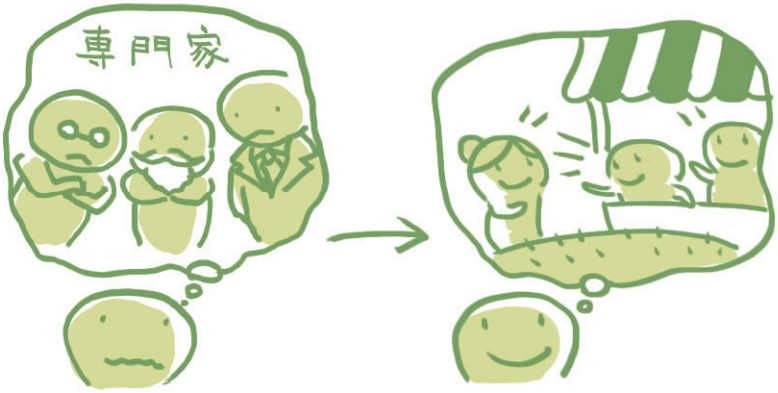
まちづくりの第一歩

私にもまちづくりはできるの？

「まちづくり」というと、何か大きくて大変なことをしなければならないイメージを持たれるかもしれません。行政に任せておけばいいのではないか、参加するとしても特別な専門知識が必要なのではないか、と思ってしまうかもしれません。

ですが、まちをよくしていく豊かなアイディアを提案できるのは、地域に暮らし、地元を知っているみなさん自身です。

この本で見てきた加美町の景観の見どころの他にも、まちの魅力はたくさんあります。地域の景観から魅力や課題を探し、新しい活動へとつなげていくためには、ほかでもないみなさん一人ひとりの協力が必要なのです。



身近なところから考え始めよう

ここでは、いくつかの質問をきっかけに、「商店街」「まちなか」「自然に囲まれた集落」といったいろいろな場所でできることを考えていきましょう。

まずは、あなた自身で質問に答えてみてください。そして、あなたが理想とする加美町の未来像にどのようにすれば近づけるのかを考えてみてください。

みんなの意見を聞いてみよう

一通り考えてみたら、家族や友達など、他のみんながどのように考えているかを聞いてみましょう。人の数だけアイディアも変わるはずです。年代や住んでいる地域、得意分野などによっても、違いが出るかもしれません。

正解や間違いを見つけ出すのではなく、様々な人の意見を聞きながら、より面白そうなことや、自分にできそうなことを見つけて、深めていきましょう。

3-1 商店街の未来を考えよう

あなたが学生のとき
どんな場所が欲しいと思いましたか？

商店街には若者が気軽に集える場が少ないと言われています。商店街をさらに若者が集いたくなるような場所にしていくには、どのような場所をつくればいいでしょうか？

あなたの考えを下に書き込んでみよう。

- ヒント -

・学校帰りに立ち寄ることができるおしゃれなカフェ
・花火、スポーツもできるバーベキュー会場
・バンドなど音楽の練習ができる音楽スタジオ

〈コラム〉 昔の子供たちの暮らし

昭和までの加美町には、川や神社、まちのいたるところで子供たちが遊んでいる様子が見られたといいます。遊びの種類も豊富で、自然の中では、川遊びや魚捕り。まちなかでは、演劇や歌などの鑑賞や、無賃で映画館に忍び込む「ぺろんこ」などもあったそうです。また、落ち穂拾い、イナゴ採り、農作業の手伝いなど、当時の子供たちは毎日が充実していたそうです。

もしあなたが持っている建物が空き家になったらどのように使っていきますか？

加美町の商店街には、歴史的に貴重な建物である蔵やまだ使える空き家が数多く点在しています。商店街に活気をつけていくには、どのように建物を活用したらいいでしょうか？

あなたの考えを下に書き込んでみよう。

- ヒント -

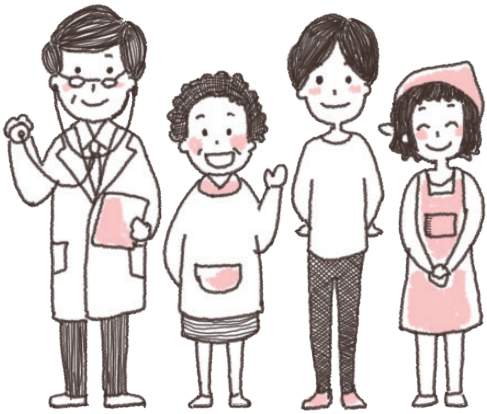
- 地元料理が振る舞われる少しおしゃれなレストラン
- ビアガーデンなど催しが開催されるイベント会場
- 食事やお土産が販売される施設

〈コラム〉 様々なお店が立ち並ぶ商店街

昭和中期までの加美町の商店街には、自転車屋、鍛冶屋、駄菓子屋、桶屋、豆腐屋、こうじ屋などといった様々な業種のお店が立ち並びにぎわっていました。手づくりのものを売る商店が多くあり、子供たちはものがつくられていく様子を興味津々に眺めていたといいます。お小遣いをやりくりして駄菓子を買うことや、親から子供が買い物を頼まれるなど、商店街では子供たちの姿が見られ、商店主は子供たちの顔をよく覚えていたようです。

〉〉『加美町記憶の口述史』p09　昔のなりわいの様子をもっと詳しく見てみよう！

3-2 まちなかの未来を考えよう



新しい出会いをつくるには どうすればいいと思いますか？

生活環境の変化に伴い、住民同士の交流機会が少なくなっています。どのようにすればまちなかでの新しい出会いを増やし、人のにぎわいをつくることができるでしょうか？

あなたの考えを下に書き込んでみよう。

- ヒント -

・音楽を披露する、まちの文化祭の開催
・月に 2 回、料理好きの住民が集まり料理をつくる、料理サークルづくり
・地域の風習やお祭りの歴史を教えあう講座の開催

〈コラム〉 地域行事を介した人と人との結束

戦後の加美町は、食料の供給が安定していないこともあり生活と農業は密接な関係にありました。田植えの時期は、大人たちの共同作業だけではなく、学校が「田植え休み」になり子供たちが手伝うなど、町をあげて農作業を支えていました。農作業で忙しくなる時期は近隣住民同士の助け合いや、「小昼」や「植え上げ」での食事を楽しむなど、にぎやかな様子がみられたそうです。農業以外でも各行政区の神社でお祭りをしてお酒を飲んだり、契約講で集落の人たちで助け合うなど人と人との結束が強かったようです。

加美町を知らない人に
どうやって町の魅力を伝えますか？

まちには魅力的な資源がたくさんありますが、それらを知らない人もいます。どのようにすれば、他の地域の人や友達に、加美町の魅力を発信していくことができるでしょうか？

あなたの考えを下に書き込んでみよう。

- ヒント -

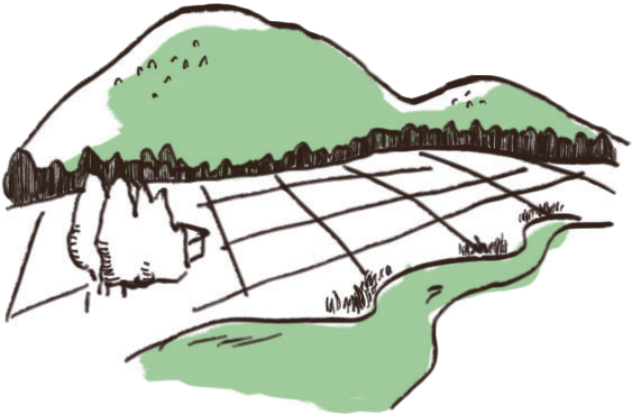
- まちの魅力や出来事を伝えていくまちなか放送局
- まちの見どころを集めた写真集づくり
- 芸術家の絵が町中に散りばめられたまちなか展示場

〈コラム〉 まちの一大イベントだった「ベコ市」「馬市」

昭和中期までの加美町では、牛や馬は農業において重要な役割を果たしていました。そのため、「ベコ市」「馬市」と呼ばれる競売が開催され、町外からも多くの人が集まり、町内外の人でにぎわったそうです。ベコ市や馬市の開催に伴い、綿菓子や「どん」と呼ばれる米菓子などの露店の出店や、サーカス、食器の叩き売りなどが開催され、お祭り騒ぎだったそうです。

» 『加美町記憶の口述史』p29　昔の暮らしの様子をもっと詳しく見てみよう！

3-3 自然に囲まれた集落の未来を考えよう



あなただったら
自然とどのようにふれあっていきますか？

加美町は豊かな自然に恵まれていますが、自然と日常的にふれあう機会が少なくなってしまいました。これから、自然とふれあう機会を増やしていくにはどのようなことをすればいいでしょうか？

あなたの考えを下に書き込んでみよう。

- ヒント -

- 休日などに走れるサイクリングロード
- 食材の収穫から調理まで体験できる料理講座
- 夏休み限定の子供たちとのハイキング企画

〈コラム〉 自然との暮らし

戦前の加美町は、自然の恵みを活用し、時には脅威を克服しながら暮らしていました。川では「うなわ式」、「ごりょうし」、「川干し」などの独自の方法で魚捕りをし、山や道端では桑の実や梨などを採って食べたりしていたそうです。一方、自然災害もよく発生していたそうで、水害が発生する度に橋が壊れ、周辺の住民達で仮橋をつくったり、渡し舟を使ったりすることで川を渡っていたそうです。また、吹雪のときは集団登下校をしたり、冬の期間だけ通う「季節分校」があったといいます。

あなただったら 加美町の自然の魅力をどうやって広めますか？

美しい里山の景観や季節の食文化など、活用できる自然の恵みはたくさんあります。町外に自然の魅力を発信し、さらに有効に活用していくには、どのような方法が考えられるでしょうか？

あなたの考えを下に書き込んでみよう。

- ヒント -

・加美町の四季を伝えるカレンダーづくり
・山菜の収穫などができる田舎暮らし体験
・加美町の夜景や星空を満喫できるキャンプ企画

〈コラム〉 自然の恵みを生かしたなりわい

昭和以前の加美町では、山では林業や炭焼き、鉱山での採掘業があり、渓流では、麻栽培が行われるなど、自然に根付いた産業が数多くあったといいます。特に採掘業が発達した地域では、採掘した鉱石や石炭を馬や牛を使って駅まで運ぶ様子が見られ、働き手のための町営住宅などもあり、山奥にも関わらず多くの人でにぎわっていたようです。

›› 『加美町記憶の口述史』p59　昔の自然の様子をもっと詳しく見てみよう！